
I wish☆

一葉 杏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I Wish☆

【Nコード】

N0432A

【作者名】

一葉 杏樹

【あらすじ】

ベルダリア

「十五年戦争」——南の大国、バルディーヤ共和国は絶望的な戦況に、国の滅亡を覚悟した。——その時：一人の女傭兵が現れる。——そして舞台は二年後：未だに「十五年戦争」は、終わらない。

BATTLE-0 プロローグ

ベルダリア
「十五年戦争」

、と呼ばれる戦争がある。

新暦317年、南の大国バルディーヤ共和国と北の大国キレート王国によるこの争いは：バルディーヤが圧倒的状況にあった。

バルディーヤの人々は絶望に満ちた日々を送っていた。―その時。

一人の女傭兵がバルディーヤに現れた―いや、少女と言うべきか。

―彼女は西ベルティの戦いで多大なる軍功を上げ、続く東ベルティ防衛戦、エレナードの戦いでも活躍してみせた。

―しかし、半年後彼女は突如姿を消す：

―人々は彼女をこう呼んだ、バルディーヤに希望と栄光を投げかける者：

「wish」

…と。

BATTLE 1-1 波乱の予感

新暦319年・冬。

バルデューヤ共和国北部、リスコットの街にも冬の息吹が感じられるようになった。

「…団長お…」

青の髪を前の一房ずつ残し、残りはポニーテールにまとめた女がストーブの前で丸まりながら言う。

『団長』と呼ばれた人物は、ロングの銀髪を左側だけ三つ編みにし、机に突っ伏している——どうやらこちらでも女らしい。

「…何でお客が来ないんスカねえ」

「聞くな」

ポニーテールの女が聞いた瞬間に『団長』は不機嫌そうにそう言った。

ポニーテールの女の名はケイト・ミルフォン。

そして『団長』の名はハイルダー・シンス。

この二人ともう一人、合わせて三人で傭兵をやっている。

もう一人の仲間は現在仕事らしく、不在である。もう一人の仲間の名はアスラと言う。

彼女はなかなかのやり手で、彼女が居るときと居ないときでは明らかに依頼の量が違う。——評判の腕ききなのだ。

「…アスラ、いつ戻って来るっけ」

「明日っスね、明日からは仕事多いっスよ」

ケイトが無理にニツと笑う。

それを聞き、ハイルダーはため息をつき、再び机に突っ伏す。

「んな、ピリピリしなくなつて、ちゃんと仕事来るっスよ」

ケイトが努めて明るく言うと、ドアのベルが明るい音をたてた。
「――ほら来た」

BATTLE—1—1—2 それは終わりへの誘い

「ほいほい、今出るっスよ」

ケイトは明るく言い、スキップで扉に向かう。
その背に向かい、ハイルダーは話しかけた。

「…ケイトは…この戦争を…どう思うの？」

ケイトが足を止める。

「終わって欲しいから…戦うのよね？」

「—考えないようにしてるんスよ」

ケイトはハイルダーに背を向けたまま言う。

「そりゃ、戦争は終わって欲しいスよ。コレ以上知ってる人が死ぬのを見たくはないスから。」

でも…とケイトは続ける。

「アタシらの仕事は、その『願い』に矛盾してるコトも、分かってるんスよね」

彼女ははじめてハイルダーを振り返り、微笑ってみせた。

「…矛盾なんかしてない」

「団長…？」

「…そう、信じてる」

「…ハイ」

ハイルダーの瞳には強い光が宿っていた。そういや…、とケイトは思う。

（…そういや、団長が傭兵始めたのは『wish』に憧れて、だったスね）

再び、チャイムが鳴った。

「…あ、今開けるっス」

ケイトは慌てて扉に駆けていった。

ガチャ。

ケイトの開けた扉の向こうに居た人物は女性だった。

キレイな茶髪が腰までのびている。

「あの…ここ、傭兵屋さんですよね？」

「そうっスよ〜！」

ケイトは彼女に向かって営業スマイル―自分がそう思っているだけで、普段と全く変わらないのだが―をしてみせた。

そして、次に彼女の口から飛び出した言葉は、ケイトを驚かせるのに充分なものだった。

「よかった、―お願いします！私を雇ってください！」

BATTLE—1—1—3 それは伝説の終わりが始まりか

「…はい？」

ハイルダーは扉を振り返り、ケイトは『客』であるはずの少女を凝視したまま、二人揃ってまばたき一つできず硬直して居た。

（…冗談…っスよね？）

ケイトは思わずそう信じたくなったが、目の前の少女の瞳は真剣そのもの、どこをどう見ても冗談とは思えない。

「マジ…っスか？」

「もちろん。」

少女は満面の笑顔をたたえて見せる。

ハイルダーは頭痛をこらえる様に頭を抱え、再び突っ伏した。

ちなみに季節は冬、『節約』が合い言葉のハイルダー達のオフィスでもストーブをきかせている程寒いのだが、少女は戸外に立ったまま、ケイトも扉を閉めるわけにもいかず、『ストーブをつけたまま扉を開けっ放しにしている』、いわゆる不経済な状態となっている。
…いや、この場合において、そんなことはどうでもいい。

二人の立つ扉を中心とした事務所内の雰囲気は、外の寒気より更に凍り付いたものとなっている。

（ど、どーするんスカ団長…）

（ど、どうする気よケイト…）

流石チームを組んで長い二人、考えることまでシンクロしている。

…流石にこの『不経済な状況』に我慢ならなくなったハイルダーは、

ついに口を開いた。

「とりあえず、中に…」

「賊だああアッ！」

にわかに大通りが騒がしくなった。

「何事」

ハイルダーは二人を押し退けて大通りに飛び出した。

大通りでは、血のついたナイフを振り回しながら走る男達が居た。その数、5名程。何でも、銀行を襲い、銀行員を斬りつけたらしい。

「——ケイト、捕捉ッ！」

「はいっス！」

長銃を構えたハイルダーと、剣を構えたケイトが大通りに走りだそうとした——その時。

二人を遙かに凌駕するスピードで、背後から二人を追い抜く影。茶髪がきらりと輝いて、散る。

「——捕捉すれば、いいんですよ？」

…言うや否やの抜刀。

「…何が起きたの…」

次の瞬間、やっとハイルダーが口にした言葉が、これだった。

目に見えた範囲で状況を説明すると…少女が抜刀した瞬間、賊五人衆は一瞬のうちに斬り伏せられた。

―しかも、全て致命部位を外しての斬撃で、だ。

少女の両手には、一振りずつの、小刀が握られていた。

彼女は小刀の露を払い、鞘に収めて見せた。

(…何…)

一瞬だが…ハイルダーの瞳には、目の前の少女と、あの伝説の傭兵がダブって見えた。

新聞の写りの悪い写真でしか見たことの無かった顔と…

「…貴方…名は？」

ハイルダーは思わず彼女にそう問うた。

―自らの期待を裏切る名を望みながら。

…しかし、彼女はハイルダーの問いに、涼やかに答えて見せた。

「…忘れました」

BATTLE—1—1—4　そして伝説は蘇る

…数分後。

ハイルダー達のオフィスでは、ケイトが『面接』と称し、先刻の少女と話していた。

「住所、氏名、年齢を言ってくれっス」

「忘れました」

ケイトはガクツと肩を落とす。

これで何回目だろう。

同じ答えしか返してこない少女に、ケイトは正直ウンザリしていた——自分が同じ質問しかしていないことは置いて、だが。

ハイルダーはそんな二人に背を向ける形で、机に突っ伏していた。

——正直、素性の分からない者を雇う訳にはいかないが…あの剣技を見るからに、少女がただ者ではないことは明らかだ。

——ハイルダーは思案していた。彼女を仲間に入れるのは、得策か否か。

「…団長、この娘、本っ当に何も覚えてないみたいっス…」

ケイトがついに折れた。

この少女、出身地や職業、年齢、住所、名前すら——本当に何も覚えていないらしい。

「団長、入れちゃうっスか？」

ケイトがハイルダーを振り返り、そう言った―ケイトもあの剣技が当千に値すると踏んでいる―ハイルダーはそう思った。

「―わかった」

銀髪の女の言葉に、少女は思わず耳を疑った。
弾かれたように顔を上げ、女を見る。

「明日、私達の仲間が帰ってくる。彼女がいいと言ったら仲間に入れてあげるわ。―とりあえず、今日はここで過ごしなさい」

ハイルダーは微笑ってみせた。少女の顔が紅潮する。

「――ありがとうございます！」

少女は勢い良く頭を下げた。

ハイルダーは少女を見てもう一度微笑い、さて…と切り出した。

「とりあえず…仮でも名前を決めなきゃね」

「そっスねえ…名無しの権兵衛じゃ、流石に可愛いそうっスもんね」
」

「名前…」

少女は辺りを見回した。…知らない土地、知らない風景。けれど…

（私はここを知っている…？）

「…『ヘレン・サリー』」

「へ？」

「イヤかしら？『ヘレン・サリー』…」

「団長、それっ…」

ケイトの狼狽える声を無視し、ハイルダーは続けた。

「貴方を今日から『ヘレン・サリー』と呼ぶわ。…わかった？」

「はいっ！」

歯切れよい返事をする少女―ヘレンに、ハイルダーは頷いてみせた。

「私はハイルダー・シンス、こいつはケイト・ミルフォン。よろしくね」

ケイトは呆然としていた―『ヘレン・サリー』、それはあの伝説の女傭兵―『wish』の本名だったからだ。

翌日、嵐は来たる（前書き）

：姉が死んだ。葬儀の列から外れた木陰で、少女は膝を抱えて座っていた。：涙すら出ない。姉が死んだ、という実感が湧かない所為か、自分が幼いから感情が乏しいのか。そんなことを考える程、彼女は利口だった。：だからこそ、感情が押しつぶされる程のショックを受けたのだろうか。そんな彼女に、一人の女性が話しかけてきた。彼女のショートにした美しい茶髪が印象強い。彼女は唯一の肉親であった姉を亡くした少女に、泣いて謝った。少女は強気に、姉の後を継ぐと言い、笑った。：女性はまだ泣いた。：『あの』女性に会った、と言えば、この国では誇り高いことなのだが：少女は――赤毛の少女は、『彼女』の泣いている姿しか知らない。――その後すぐ、『彼女』は消息を絶った。

翌日、嵐は来たる

―バルディーヤ北部、リスコットの裏通り。

朝、もう日も高いと言うのに、薄暗いそこを赤毛の少女が足早に駆けていった。

年の頃は12歳ぐらいか。

髪は二つに分け、それぞれ上の方で結わえている。

その髪が風になびき、まるで炎の様だった。

―追っているのか、追われているのか。

ただ、一心不乱に走っていた。

やがて少女はちょっとした広場の様な場所に出る。

彼女は素早く辺りの気配を伺った後、今度は肩で息をしながら辺りを見回す。

(…見失った) …どうやら彼女は

「追う側」

だったらしい。

もう一度辺りを見回してからため息を一つつき、のろのろと歩きだした、その時。

―…チカッ彼女の背後で、何かが光った。

「―え…!？」

油断した、と後悔しても、もう遅い――!――ッだめだ、撃たれる

―!…かと思われた。

…目にも鮮やかな剣技。

まるで刃の乱舞の様な…

刃の乱舞は彼女を狙っていた『狙撃者』をあっさり仕留め、そしてどこかへ走り去っていった…

しばし呆然としていた少女は、改めて辺りの気配を伺う。…すでに

「追っていた者」

も

「狙っていた者」

も気配を消していた。

…一体誰だったのだろう…この剣技、見たことがある…？

赤毛の少女——アスラ・ヒス・エミリーは、何かの予兆とも取れる
胸騒ぎを覚えていた。

BATTLE—1—2—1 鬼火

アスラは最近住み着いているオフィスを目指して歩いていた。
先刻の余裕の無さとは打って変わり、手にはコーヒー缶を持っている。

ここでアスラの容姿に目をやってみよう——他の者が、セーターやダウンコートを着込み、マフラーやミトンを着けていると言うのに、彼女はトレーナー地のフード付きヨットパーカーを上着に着いているだけだった。

「少し…寒いかな…」

アスラはコーヒーをすすりつつ、そうひとりごちた。——寒いのが苦手な『団長』が聞いたら

「ちょっと、だと？」

とでもツツコンで来るだろうな、とも思いながら。

…どんっ。

アスラは前面に衝撃を感じた。

「わ…ごめんなさい…」

彼女は一応謝り、視線を上に行った。

—そこに居たのは…指名手配されているギャングのボス。
そして子分×3。

…ボスのズボンにはアスラの持っていたコーヒーでじっとりと濡れている。

「おい、嬢ちゃん…ゴメンで済むと思うのか？」

凄みをきかせる子分その1に向かい、あら、とアスラは言う。
「クリーニング代を出した方がいいかしら？それとも火傷をしてしまった？…貴方、自分の正体がバレてないとも思ってる？」

「貴様…！」

「おっと、あたしにケンカ売ったらホントに火傷するよ？…悪いこと言わないから引き下がりなよ」

アスラは挑発的に笑う。

—アスラの小馬鹿にした口調に、子分達はキレて彼女に襲いかかった。

—手にはナイフ、メリケン、銃。

それらを目にしてなお、アスラが動じることにはなかった。

やれやれ、といった感じに首を振ると、すっ…と手を天に向ける。

「…鬼火！」

—瞬間、彼女の全身から炎が立ち上った。その炎はいくつもの火の玉となり、アスラを中心にギャングを囲み…

—…ボツ！

…辺りが目映い光に包まれた…

次の瞬間、アスラの周りに居たギャング達は全身に火傷を負い、地に倒れ伏していた。

彼女は怯えきったボスの後目に、舌打ちをして歩いていく。

…この時ボスは悟っていた。——これが、あの、『鬼火のアスラ』
の実力なのだ、と——

BATTLE 1-2-2 それは再会と真実の音

「…あ、おかえりっス」

扉を押し開けた人物をみとめ、ケイトは笑いかけた。

ツインテールの赤毛、髪と同じく紅い瞳。

―『鬼火のアスラ』こと、アスラ・ヒス・エミリーだった。

「でも遅かったスね、帰るの朝の予定だったんじゃない？」

「帰るついでに小遣いでも稼いでやろうと…スパイ団を追っかけてたの」

ケイトの言葉にアスラはしれっと応じる。

「で…捕まえられたんスカ？」

イヤ、とアスラは続ける。

「撒かれた挙げ句に狙い撃ちされそうになった…誰かが助けてくれたけどね。」

「そっスカ、じゃあ、その袋は？」

ケイトはアスラの左手に握られている袋を指差し、にこっと笑って見せた。

やれやれ、とアスラは溜め息をつく。

「…バカなギャングがケンカ押し売ってきたの―腹立ったから全身火傷のオマケつけて警察に引き渡してきた」

「成程、さっきの火災騒ぎはアスラの所為だったんスね？」

「…どこで聞いたの」

「風のウワサっスよ」

ケイトはケチのつけようのない笑顔を見せた。アスラはまた溜め息をつく―…やがて諦めたように視線をそらした。

「…アンタはいつもそうだよね…どこで仕入れて来るのやら。」

…カチャ

その時、扉が軽やかな音を立てて開いた。

「ああ、おかえりっス」

扉を開けた人物をみとめてケイトは笑った。ヘレンだった。

「遅かったスね、何してたんスカ？」

「女の子が襲われていて…助けるついでに警察に突き出してきたの…!？」

ケイトと聞き慣れない女の声に気付き様子を見に来たアスラと、それを認めたヘレンは同時に硬直した。

「…アナタ…」

—間違いない。あの時襲われていた女の子—

「…アンタ…」

—間違いない。…忘れない。あの時…泣いていた…

—伝説の…

BATTLE 1-2-3 現実と過去の門

「…アンタ…!」

アスラは目を見開き、扉の前にケイトと並んで立つ、長髪の少女を見つめた。

―当の少女もまた、アスラを見つめている。

「あれ? れ? お知り合いっスか二人とも…」

ケイトが妙にぎくしゃくと二人を見比べる。

ケイトの言葉に我に返った二人は…

「アンタ、へ…」

「アナタ、さっき妙な連中に追っかけられてた子よね?」

「…え?」

ケイトとアスラは顔を見合わせた。

「妙な連中に追っかけられてた?…また変なコトに首突っ込んだんスね?」

「バツ…なりゆきだよっ、なりゆき!」

胡散臭い目で見てくるケイトに対してアスラは全身全霊で否定する。その様子を見ていた少女は微笑んでアスラに手を差し出す。

「傭兵だなんて知らなかった。私はヘレン・サリー。よろしくね！」

「…アスラ・ヒス・エミリー…よろしく」アスラは握手をしながらも、何か不自然なものを拭い去れずに居た。

…あれは…ヘレン・”wish”・サリー…なのか…？

「と、言うわけで」

ハイルダーが一同を集めて切り出した。

「アスラも帰ってきたことだし、今日をもってヘレンを傭兵団『Silver Edge』の一員と認めます―文句は無いね？」

ハイルダーの言葉にケイトはニコニコ顔で拍手、アスラはむつつりと黙り込んでいる。

「じゃ、夕飯にするよ？今日はアスラが夕飯係だね」

「ええ！？何でアタシ！？」

「昨日はアスラの代わりにヘレンがやってくれたんスよ、だから、ホラ」

ブーたれるアスラをなだめるようにケイトが言葉を継ぐ。

アスラはまだ不機嫌そのものだったが、諦めたように息を吐く。

「…わかった。わかりました。」

足を半ば引きずるように調理場に向かうアスラに、
「て、手伝う」

とハイルダーが追いすがった。

「…どうしたのアスラ、何かいつもに増して不機嫌そうだけど」

「…いつもに増してってどういう意味さ」

ポテトを剥きながらアスラはぶっきらぼうに返した。

「ヘレンのコト？」

「…っ、アイツはっ…！」

ぱつとハイルダーに向き直り、アスラはまくし立てる。

「アイツはっ…何で自分の名前覚えててっ…何だよっあの髪とか！
…絶対…”wish”なのに…」

「今何と言ったの！？」

しん…と調理場に静寂が落ちた。

「…ヘレン・サリー…でしょ？」

「あれは私が『仮』の名前につけてあげたの」

「なぜ…」

「あの子、自分の名前も覚えて無いらしいのよ」

「…それが本名だとしたら？」

「は？」

「ヘレン・”wish”・サリー…だとしたら？」

「…嘘でしょう…」

ハイルダーは呆然とした。

アスラは何の根拠があつて、そんなことを言うのか分からなかった。

「アタシは昔、”wish”に会ったことがある。」

「…”wish”に…？」

アスラは頷く。

「氣、が一緒だった…なのに別人みたいだった…」

ごめんね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0432a/>

I wish☆

2010年11月5日19時07分発行